

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(中南地区) (第2回) 概要

日時：平成28年11月21日(月)

15:00～17:00

場所：グリーンパレス松安閣 2階 鳳凰の間

<出席者>

委員

佐々木 健 委員、山内 孝行 委員、長利 允弘 委員、武田 登 委員、
木田 専一 委員、金枝 尚明 委員、吉原 則幸 委員、柿崎 博 委員、
桑田 純也 委員、須藤 君男 委員、鹿内 久人 委員、新谷 貴城 委員、
一戸 勝美 委員、齋藤 治 委員、安藤 智史 委員、荒谷 一昭 委員、
古山 哲司 委員(進行役)

オブザーバー

奈良 昌孝 県立弘前高等学校長、 三上 聡 県立弘前中央高等学校長、
三上 隆裕 県立弘前南高等学校長、 飛内 文代 県立岩木高等学校長、
松野 洋祐 県立黒石高等学校長、 西館 実 県立柏木農業高等学校長、
高橋 和雄 県立弘前工業高等学校長、永川 信子 県立黒石商業高等学校長、
佐藤 昭雄 県立尾上総合高等学校長、相馬 純子 県立弘前聾学校長、
泉澤 明德 県立黒石養護学校長

1 開会

2 委嘱状交付

佐藤高等学校教育改革推進室長から、山内委員へ委嘱状を交付した。

3 高等学校教育改革推進室長挨拶

佐藤高等学校教育改革推進室長から、挨拶があった。

4 事務局説明

(1) 第1回地区意見交換会及び意見等記入票における主な意見

(2) 第1回地区意見交換会において要望等があった県立高等学校のデータ及び他県等の参考事例

事務局から、資料1及び資料2について説明した。

(3) 第1回地区意見交換会での意見等を踏まえた学校配置シミュレーション

事務局から、資料3について説明した。

5 意見交換

委員から、次のような意見があった。

《中南意見1》

- 1回目の意見交換会では、1学級当たりの定員が40人では多いのではないかと
の意見があったが、自分もその意見に賛同する。教員が40人を教えるという
のは厳しいのではないか。自分は30人程度が適切だと思う。このシミュレーシ
ョンは1学級当たりの定員を40人として作成されているが、1学級当たり35
人とする考え方は排除するものか。
→（事務局）現行の法律では1学級当たり40人を基本としている。現在も、実習
を伴う学校や2学級規模等の小規模校については35人としているところであり、
このシミュレーションはそのような現状を踏まえたものである。
- 全ての学校がこれまで素晴らしい教育活動をしてきたところであり、それぞれ
に伝統があるので、地域として是非残してもらいたいという思いはよく分かるが、
中南地区は、中学校卒業者数が10年後には700人以上減少し、9から10の
学級減が必要という状況である。シミュレーションにおいても弘前高校以外の高
校は学校規模の標準である1学年当たり4学級を維持するとなれば、自動的に弘
前中央高校は6学級から4学級へ、弘前南高校も6学級から4学級へ、弘前実業
高校、弘前工業高校ともに3学級減ということが数値上は考えられるが、果たし
てこれで良いのか疑問である。中南地区は、普通科の割合が他地区に比べて低い。
これでは、ますます普通科の割合が下がってしまうと感じる。これまで弘前実業
高校藤崎校舎、弘前南高校大鱈校舎、岩木高校を統合してきたことを踏まえると、
異なる学科の統合も視野に入れて考えざるを得ないのではないか。
- 生徒数が激減するのは事実である。また、黒石高校と黒石商業高校はともに倍
率が低い状況である。それでは競争心も徐々に薄れてしまう。以前は、黒石市内
には黒石高校だけがあり、進学コースと就職コースに分かれていたが、時代の流
れで黒石商業高校が設置された。しかし、現状のままでは、黒石市の活性化にも
つながらない。このことは、中南地区全体の課題として考える必要がある。黒石
高校と黒石商業高校を統合することで教育活動を充実させ、地域の活性化につな
げていけば良いと思う。
- 学校規模の標準は満たさなくても全ての学校を残した方が良いと考えている。
- 実施計画期間内の学級数の減少について、どのように算出したのか伺いたい。
→（事務局）既に生まれている子どもの数を踏まえた上で、私立学校への入学者、
他県や他地区の転出入等の様々な要素を勘案し試算したものである。

《中南意見2》

- 中南意見2におけるシミュレーションは、なぜ重点校、拠点校、地域校、連携校という枠組みを設ける必要があるのかという発想から提案したものである。重点校や拠点校と連携校との交流ということがどういうものか質問し、説明を聞いたが、学校間の交流や教員研修などは、現状の体制でもできることではないかと改めて思ったところである。イメージの問題かもしれないが、東青地区の意見にも、重点校、拠点校という表現上の格差について指摘があり、生徒のモチベーションの低下につながるおそれがあるとあった。このことによって様々な予期せぬ課題が生じるのではないかと思う。

農業1つとっても地区によって産業形態は全く違う。このことを踏まえれば、あえて拠点校等を設置する必要はないのではないかと思う。今の体制でも県教育委員会が学校の間に入りお互いの学校をつなぐことで十分やっていけるはずである。したがって、重点校、拠点校という枠組みそのものが必要ないと思う。

重点校や拠点校は、将来的に生徒数が少なくなったとしても、学校がなくなることはないという手形のようなものを感じる。

- 今の意見は、重点校や拠点校という学校は安泰だが、他の学校はどうなるか分からないという誤解を与える危険もはらんでいるということだと思う。そのようなことを避けるためにも、基本方針や実施計画も含めて、県教育委員会では十分に説明していくことが必要だと思う。

- 中南意見2の趣旨は理解できる。しかしながら、第2期実施計画を考えた場合、中南意見2のシミュレーションで新たに示した拠点校の出願状況等を踏まえると、このように拠点校を複数指定するには、無理があるのではないか。この場合、学級減を行う対象校の範囲が狭まり、結果として普通科の学校が少ない中南地区では、更に普通科の学校に影響が出てしまう。

- 普通科が少ないと言うが、なぜ普通科が多くなってはならないのか。専門高校でも普通科でも平等に教育を受ける権利がある。専門高校からの進学状況についての質問もあったようだが、専門高校ではまず専門教科を学ばなければならない。普通教科の履修が少なくなり、大学進学についてはかなり不利である。専門高校を卒業しても大学に進学できるような大学側の受け入れ体制の改善も必要だと思う。個々の目指す進路に応じて学科を決めるべきと考えている。普通科が多い少ないと考えることもあるかもしれないが、それだけの需要があるかどうかもある必要がある。学校規模・配置については1市町村で考えるのではなく、中南地区全体で考える必要がある。黒石高校、黒石商業高校が統合して総合高校にするということがあったが、弘前市内の高校でもこのような統合があっても良いのではないか。1年生ではくくり募集して、2年生からは選択していくということが

あっても良いと思う。また、入学してから編入できるような仕組みをある程度考えても良いのではないか。

中南地区には、農業科、商業科の拠点校を設けることも良いと思う。そのためには学校の特色を明確にすることが必要だと思う。

- 中南意見2は、基本方針に示した育成すべき人財という点を踏まえると理想的だと考えるが、これからの人口減少を踏まえると、連携校の学級減よりも統合の方が必要になってくると思う。

《中南意見3》

- 中南意見3について、黒石市民としては、非常にショックを受けたものである。しかしながら、黒石市の実態としては、来年度から中学校4校が2校に、現在10校ある小学校も平成32年度には4校とする計画がある。黒石高校、黒石商業高校ともに存続してほしいというのが市民の感情だと思うが、生徒数の減少を考えれば、そうもいかないだろう。

新設校の学科を見ると普通科、看護科、商業科とある。黒石高校の看護科は現在専攻科があり非常に特色のある学科である。黒石高校は北東北の公立高校で唯一看護科を設置しており、生徒からの人気が高く就職率も高い。生徒は、地元はもちろん、弘前市や県南地方からも入学している。商業科の情報デザイン科も県内に1つしかない学科であり、特色がある学科である。したがって、新設校ではこれらの特色が高まるような工夫をしてもらいたい。情報デザインに関する学科がある高校は全国で7校しかない。したがって、情報デザイン科については、例えば専攻科を設置するなど、資格が取得でき人気が高まるような取組をしてもらいたい。普通科、看護科、商業科を合わせた学校であれば、看護科、商業科に特色を出し、魅力あるものとしてもらえれば注目も集まるだろう。

黒石高校と黒石商業高校の統合については、黒石市の生徒数が10年間で約100人減となることなどについて、市内の中学校等にも丁寧に説明してもらえれば黒石市民も十分理解できるのではないかと感じている。

- 地元の黒石市においてはある程度納得している考え方なのではないかと感じた。
- 西目屋村は弘前市に中学校の運営について事務委託している村である。以前は、県内の各市町村に高校を設置するのではないかとと思うほど高校が設置された。当時は、まさかこのような状態になるとは考えていなかったと思う。自分が以前勤務していた弘前市立第四中学校を見ても、当時1,281人であった生徒数は今や激減し、470人程度となっている。少子化どころではない。ついにここまで来たかという気持ちである。

先程中南地区は他地区と比較して普通科が少ないという話があった。中南管内の普通科の入学者選抜の倍率は他地区よりも高い。このことから、中学校教員の

進路指導は以前、普通科を上位としたものとなっていたため、普通科を希望する生徒が多いにも関わらず、普通科の高校の進学を回避させるような指導を行っていたこともあった。

各市町村は、いかにして地元の高校を維持していくのかということで頭を悩ませているようだ。しかし、現在黒石市内で一番生徒数が多い中郷中学校と黒石中学校を合わせても全校生徒が800人を切っている。平成34年度には、中学校卒業生数が200人程度になるものと見込まれる。その状況を踏まえると、現状の2校体制では難しい。

現在、保護者が一番苦心しているのが交通費の捻出である。黒石市内から弘前市まで電車を使用した場合、1年間で約120,000円かかる。黒石市内の生徒はどこに行くのかと言うと、1ヶ月8,000円程度でスクールバスを出しているため、東奥義塾高校に通学している。そのような状況であることから、一番考えなければならないのは交通費の捻出になる。したがって、黒石高校は駅の近くに立地していること、黒石商業高校は駅から離れていることを考えなければならない。

黒石高校に黒石商業高校の機能を入れるということは非常に効果があると思う。特に情報デザイン科には弘前市からも入学すると思う。普通科ももちろん必要である。このように効果的に統合した総合高校として新設することは非常に良いことだと思う。

- 自分も黒石高校と黒石商業高校の統合の意見に賛成である。本当に子どもたちが少なくなり、定員割れしている高校もかなりある。そのような中、高校の数もいずれは少なくしなければならない。しかしながら、例えば、生徒数の減少に伴い、中南地区から商業高校がなくなってしまうと、商業を学ぶために他地区に進学しなければならない、それは子どもたちが学ぶ環境としては良くないことである。黒石高校と黒石商業高校は、普通高校と商業高校の統合だが、いずれは、弘前市内においても普通高校と弘前工業高校、普通高校と弘前実業高校、弘前工業高校と弘前実業高校の統合等のパターンを考えながら、統合し学びの機会を確保していくことは非常に良いことだと思う。

ただ、このシミュレーションを見ると黒石高校と黒石商業高校を、合わせて3学級減ることになっており、黒石市以外の高校は2学級の減であるので、この学級減の配分は逆の方が良いのではないかと。

- 自分も弘前市内の高校は2学級の減ではなく3学級の減が良いのではないかとと思う。弘前市内には私立高校が4校ある状況を勘案すれば、黒石市内の高校で3学級減ということは厳しいのではないかと。
- この学級減については、生徒数や生徒の流入・流出を勘案したものだと思う。したがって、この学級減をどの程度にするのかは、県教育委員会が数値をしっかりと把握した上で検討してもらいたい。

- 中南意見3が一番現実的だと思う。全ての地区にバランス良く配置すればどうしても小規模化してしまい、高校として、生徒の成長に向けた取組や部活動に無理が生じる。この中南意見3のようにすることで切磋琢磨しながら目的意識を持って教育活動を行うことができると思う。

しかしながら、その際には、通学に関わる補助等により、保護者の負担を軽減するということも同時に考えていかなければならないと思う。

- 普通科等の重点校は、各地区に設置して当然だろう。拠点校についても地域によって産業構造が違うので、各地区に設置した方が良いと思う。

また、子どもたちの多様化している希望に応えられる学校配置を目指してもらいたい。そういう意味からも黒石高校や黒石商業高校のように統合することは良いことだと思う。その際、学校配置については現行の校舎を活用することになると思うが、秋田県では3校が統合し、新たな学校として学校名も変えて設置している。例えば、黒石高校と黒石商業高校を統合する場合は、どちらの学校名を使用するかによって、地域の住民の反応も違ってくると思うので、そのようなことも勘案してもらいたい。

- 黒石高校と黒石商業高校の統合については大鰐町としても大いに結構なことである。大鰐町から黒石商業高校へ通っている生徒は、JR奥羽線で弘前駅まで行き、弘南鉄道に乗り換え、黒石駅から更に歩いていくという状態である。したがって、統合する場合は、黒石駅から近い黒石高校の場所に設置してもらえれば良いと思う。

また、高校教育をオール青森で考えるなら、公共交通機関の状況も考えてもらいたい。特に、弘南鉄道大鰐線は廃線になるのではないかと危惧されている。そのような交通機関を利用して通学する生徒には交通費を補助してもらいたい。

- 西目屋村には高校はないが子育て日本一を目指している。公共交通機関はバスしかなく、弘前市内まで片道1,000円かかる。このため、高校父母会と西目屋村役場と弘南バスとで協議し定期代を安くした上で、高校生全員に年間約10万円補助している。

ある地区では、県で通学費を補助すべきと主張しているようだが、そのようなことを県ができるはずがない。公共交通機関と協議した上で、各市町村が取り組むべきである。西目屋村では通学支援について20年以上取り組んでいる。

進行役から、青森県立高等学校将来構想検討会議の答申にあった中南地区における農業科、商業科を集約化することの効果や課題について、委員に発言を求めた。

- 確かに中南地区には農業科、商業科が複数設置されている。今後、地区の学校配置を検討していく際には、これまでも議論していると思うが、生徒のニーズや地区の高校の特色等の実態も合わせて考慮していくべきである。

- 自分は、あえて集約する必要がないと思う。産業界は人口減少時代をどのように生き抜くかがテーマとなっている。その上で、地域の特色をいかに出していくかが課題となっている。その中で高校の取組が地区の特色を出す有効な手段だと思う。県としてどのように人づくりを考えていくのかという入り口論が必要である。

産業界は就職のミスマッチが課題であるが、これは高校入学にも言えることだと思う。例えば、商業高校や農業高校に進学すると3年間その教育を受けるしかない。3年間のうちに気持ちが変わることもあるだろう。入学してからも進路変更できるよう、様々な学科がある学校が地区に設置されていても良いのではないか。生徒の将来の学びの選択肢を増やす意味においても学科の集約は必要ない。さらに、高校教育を県全体で考える必要があり、黒石市の看護科や情報デザイン科のような特色ある学科が弘前市にも設置することがあっても良いのではないか。そのためには、まず県が人づくりという観点からの高校の学科の方向性について決めるべきである。

進行役から、中南地区における農業科、商業科の状況について、オブザーバーである柏木農業高校長及び黒石商業高校長に発言を求めた。

- 現在の農業科について説明したい。柏木農業高校は農業に関する学科が4学科あり、その4学科で連携をしながら課題研究等に取り組んでいる。弘前実業高校については、農業、商業、家庭、スポーツ科学の学科で、深みのある学科の連携がなされてきていると思う。同じ中南地区ではあるものの弘前実業高校では、清水森ナンバや桜に特化した研究等も行っている。それぞれに特徴的な教育がなされてきたものと感じている。
- 実態として、弘前実業高校及び黒石商業高校には、商業科2学級、情報処理科1学級がそれぞれにある。本校の商業科、情報処理科の生徒の実態を見ると、青森市浪岡地域、黒石市、平川市、藤崎町等からの生徒がほとんどであり、弘前市から通っている生徒は非常に少ない。一方、情報デザイン科は、浪岡地域を除く青森市、大鰐町、五所川原市など遠い地域からも進学している。情報デザイン科については、不登校経験者等様々な特性のある子どもたちも進学しているので、同じ商業科の中でも情報デザイン科は商業科、情報処理科とは異なる学科である。商業科、情報処理科については、これから生徒数が減少する中で黒石市内に集約したとしても、弘前市内から黒石市内へ通学するということはなかなか難しいことだと思う。

《その他》

進行役から、全体を通して意見を求めた。

- 自分も中南意見3のように黒石高校と黒石商業高校が統合し、この学科が連携して新しい学校としていくことが望ましいと思う。

交通費については保護者の負担にもなっているのに、西目屋村では補助に取り組んでいるとのことだったが、他の自治体でも進めていただければ良いと思う。

- これまでの意見交換を聞くと、自分も中南意見3が良いと思う。実際に保護者が悩むのは交通費である。自分は岩木高校を卒業した。交通費を節約するという目的もあったが、自分は3年間西目屋村から自転車で片道40分くらいかけて通学した。

中南地区には普通科が多くあった方が良く思う。自分は将来の目標が定まっていないうち、普通科で学習した結果、自分の進むべき道を見つけ専門学校に進学した。

農業科と商業科の統合については、農業科は農業としての専門的知識が必要であるし、商業科は商業の専門的な学習も行っていることから、統合することについては影響が生じる懸念がある。したがって、それぞれの高校としてそれぞれエキスパートを育てていけば良いのではないかと。

- 中南意見3で良いと考える。今まで、黒石商業高校の商業科・情報処理科・情報デザイン科で培ってきた実績がなくならないよう、1学級ではなく、せめて2学級としてほしい。

学校の配置がどう変わろうとも、交通費の無料化については是非取り組んでもらいたい。そうすれば生徒はどこでも学習できる。

弘前高校の6学級は平成39年度まで維持できるのか。学力が下がるのではないかと懸念している。

進行役から、中南地区における夜間定時制課程の状況について、事務局に説明を求めた。

- (事務局) 中南地区には夜間定時制課程を有する高校として、尾上総合高校と弘前工業高校がある。尾上総合高校の夜間であるⅢ部の入学者数については、平成26年度12人、平成27年度3人、平成28年度2人、弘前工業高校については、平成26年度17人、平成27年度7人、平成28年度8人と、平成27、28年度についてはいずれも一桁となっている。

委員から、次のような発言があった。

- 夜間定時制課程は、かつて弘前市内では弘前中央高校にもあったが、現在は弘前工業高校にしかない。夜間定時制課程に進学する生徒数や、交通費、通学時間、

生徒の安全等を考えれば、工業科ではない夜間定時制課程は弘前市内にあるべきである。尾上総合高校の昼間部については、現状のままで良いと考える。

進行役から、尾上総合高校の夜間定時制課程に生徒がどの地域から通学しているのかオブザーバーである尾上総合高校長に発言を求めた。

- 夜間であるⅢ部には、現在1年次から3年次まで合計10名の生徒が在籍しており、弘前市から4名、黒石市、平川市から4名、田舎館村、青森市浪岡地域から通学している。
- 尾上総合高校Ⅲ部に通学することは大変だということから、弘前市内へのサテライト教室を設けることを提案したところであるが、場所の課題や経費的な面からも様々な課題があると思う。また、弘前工業高校定時制課程を普通科に転換することについても、なぜ工業高校に普通科が必要なのかという議論はあると思う。例えば、弘前第一養護学校高等部が使用する現岩木高校の校舎の一部を使用して夜間定時制課程を設置することは考えられないか。
- 特に女子生徒の夜の通学を考えると、弘前市の目に付くところにあつた方が良いと思う。何かあつたときに困るので、安全確保することが大事だと思う。
尾上総合高校では、Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部を上手に連携し生徒に単位取得させている。難しいかもしれないが、例えば、NHK学園等の他の学校と連携し、その単位も認めるような取組もあれば良いと思う。尾上総合高校に進学すればそのようなこともできるとなればより魅力的になると思う。

進行役から、弘前工業高校の夜間定時制課程に通学する生徒の状況について、オブザーバーである弘前工業高校長に発言を求めた。

- 現在、弘前工業高校定時制課程には43名の生徒が通学している。工業教育という意味では、働きながら学ぶという生徒が少なくなっているので役割は終えたのだと思う。職業教育を通して社会性を身に付けるとともに、何らかの資格を取得できるような取組をしているが、定時制課程の指導の困難さは感じている。尾上総合高校のような整った指導体制で、その生徒に合わせた教育を行うことが本来の姿ではないかと思う。
例えば、弘前工業高校に普通科を設置してはどうかとの意見があつたが、弘前工業高校としては学校教育の方針から考えると、指導に困難を感じるが増えると思う。
- 昨年、黒石高校の定時制閉課程式典に行ったが、卒業生を見て、良くここまで育ててくれたと感じた。尾上総合高校のⅢ部に進学する生徒がほとんどいないと

いう実態であれば閉課程も理解できるが、まだ入学者数もあるようなので、存続を考えてもらいたい。定時制課程は決して人数だけではない事情がある。

進行役から、次回の第3回地区意見交換会の開催前に、各委員に対して、これまでの意見交換会における意見等を項目ごとに整理し、当地区の主な意見を整理案として送付するよう指示があった。

その上で整理案について事前に各委員から意見を提出し、第3回地区意見交換会に資することとしたい旨の発言があった。

○ 今後の進め方について再度確認したい。

→（事務局）3回の地区意見交換会を開催し、委員からいただいた意見を参考に平成29年度の早い段階で県教育委員会において実施計画（案）を公表したいと考えている。その実施計画策定に資するための地区意見交換会となっている。

6 閉会